「底が突き抜けた」時代の歩き方 530

「それから世界はどうなるの？」―映画『ダーウィンの悪夢』『ホテル・ルワンダ』

評論家の加藤周一が０６．２．２２付朝日夕刊で９・１１テロの後、「『報復』と星条旗一色の報道が数日続いた後」、テレビ画面の中で小学校３年くらいの少女が、「テロがあって、報復をして、またテロがあって、報復をして……、それから世界はどうなるの？」と尋ねたことを知って、《子供は時に根本的な問いを発することがある》と書く。《答えは米国の大統領も知らない。おそらく空を吹く風だけが知っているのだろう。》いや、本当は誰もが知っているのだ。世界は縮小し、破滅していくことを。知らぬ振りをして、「テロがあって、報復をして、またテロがあって、報復をして……」を繰り返すことのうちに、世界の破滅が予兆されているからだ。もちろん、テロを報復によって根絶することこそが全人類が生き延びる唯一の途であると説く人々はいる。米国はその声のもとに結集して、「テロがあって、報復をして」の無限の悪循環の中に嵌まっているのだ。
「テロがあって、報復をして」の愚かな繰り返しをもう止めようじゃないか、と各国の有力な指導者たちが声を揃えれば解決するという問題ではない。いや、ひょっとすると、そういう問題かもしれない。各国が手に手を取って、テロがあっても報復しないことで、テロを抑止し根絶させることができると力強く確信しさえすれば、テロはなくなるかもしれない。ではテロに対する報復をやめれば、本当にテロは鎮まるか。逆にテロが拡大することはないか。テロが拡大したときにも報復を控えるか。更にテロが拡大すればどうなるか。テロを被る人々の被害も拡大するだけではないか。そのような人々は報復をしない政府に対して抗議の声を上げないだろうか。ここで初めて報復とは単にテロを抑え込むやり方だけでなく、テロによる被害の抑止でもあることがみえてくる。９・１１テロに直撃された米国がもし報復に起ち上がらなかったとしても、三度目の大規模なテロは起こらなかったと想像することは困難である。
《誰の人生も幼年時代で始まる。母語の習得から日常周辺の世界の理解まで。それが個人の社会化過程の第一段階である。子供は世界の根本問題について、出来合いの答えを知らないから、自分の眼で見た、それぞれの個性に応じた疑問を発する。年齢が進み、社会化が第一段階を過ぎれば、すべての疑問は家庭やメディアや学校の社会的習慣に従って処理されるだろう。成人は子供が天使のようだと言う。天使または天真爛漫（てんしんらんまん）の子供。しかし、そういう子供の現実はない。》
そう、《そういう子供の現実はない》と書く加藤周一の言葉に補足をしなければならない。幼年時代に子供もまた、「子供の現実」の中で生きる。しかし、「子供の現実」は

大人の手で守らなければ、「大人の現実」によっていつでも破棄される。つまり、「子供の現実」が「大人の現実」を侵食することは起こりえないけれども、「大人の現実」は「子供の現実」をたやすく侵食するので、そこでは子供は小さな大人として生きることを余儀なくされ、いわゆる「子供時代」というものは存在しなくなる。ロマン・ポランスキー監督の映画『オリバー・ツイスト』は、急激に発展するイギリスの自由主義経済社会の下で女性も子供も工場での長時間労働を強いられる、「子供時代」など持たない小さな大人たちが群れをなす最底辺の下層社会を生きるオリバーが、いかに「大人の現実」に囚われずに、《自分の眼で見た、それぞれの個性に応じた疑問を発する》「子供の現実」を持ちつづけたかを描いている。

子供も年齢と共に社会の中に入っていき、やがて「大人の現実」の中に解消されていく「子供の現実」から、《世界の根本問題について、出来合いの答えを知らない》が故に、根本的な問いが発されることがある。テロと報復の繰り返しで、「それから世界はどうなるの？」という根本的な問いは、「大人の現実」では答えることのできない問いである。なぜなら、テロと報復の繰り返し自体が「大人の現実」の中で育まれているからだ。したがって、この根本的な問いに答えることのできる者は、この問いを発する「子供の現実」の中から出現する必要があり、そうでなければ、問いそのものがさ迷い、消滅していくだろう。大人になることは、「子供の現実」から抜け出して「大人の現実」に紛れ込むことではない。オリバーのように「大人の現実」を「子供の現実」において生きていく、そのことにおいて大人であらねばならないだろう。

「子供の現実」から発される根本的な問いと共に、自分も育成しなければならない。そのとき、根本的な問いを通して「子供の現実」は「大人の現実」に接触することができる。「子供の現実」から発される根本的な問いは、「大人の現実」の中で答えを見出していく以外にないのだ。つまり、こういうことである。「子供の現実」から発される根本的な問いに「大人の現実」が答えられないのは、「大人の現実」が本来的にその根本的な問いを含んでいないからだ。「大人の現実」が問いに必死に答えるためには、その問いを持ったまま「大人の現実」に入っていく大人として現れることが不可欠の前提となり、問いもまた成長しなければならないことに気づき始める。問いが根本的な問いでありつづけるためには、問いが根本へと遡っていく必要があるのだ。

テロと報復の繰り返しで、「それから世界はどうなるの？」という問いには、もう一つの「それから世界はどうなるの？」という問いが裏面に沈んでいるだろう。それは、テロがあっても報復しないとすれば、「それから世界はどうなるの？」という問いである。そうすると、世界はテロが存在しつづけるかぎり、報復してもしなくても、「それから世界はどうなるの？」という問いに立ち往生しているのがみえてくる。問題はどうしてテロが起こるのか、にどうしても遡る。テロを起こしたい連中がテロを起こす、というトートロジー（同義反復）を退けるなら、テロもまた報復であることがわかる。な

にに対する報復か。貧困、差別、迫害などのあらゆる不当な仕打ちを世界の地方にばらまいている、先進国優位の世界システムに対する報復だといえばよいだろうか。もしもテロを誘発せしめずにはおかない原因が世界システムに内在しているなら、その世界システムを垣間見ることから、「それから世界はどうなるの？」を考えなくてはならないだろう。

オーストリア出身の映画作家フーベルト・ザウパーが製作した『ダーウィンの悪夢』について論じている東京外大教授西谷修のエッセイ（『ＵＰ』０５．１１）に先導されて、テロを誘発する世界システムについて考えてみたい。ドキュメンタリーの舞台は、アフリカ中東部にあるビクトリア湖の南湖畔、タンザニアの町ムワンザである。ムワンザの小さな空港からは毎日、大きな輸送機で５百トンのナイルパーチのフィレが輸出されている。《ナイルパーチはビクトリア湖で獲れる大型の白身魚で、日本でも外食産業などでよく使われているという。住民の多くが慢性的な飢餓状態にある貧しいこの国の、唯一の輸出品、それも皮肉なことに食品である。》

この魚は固有種ではなく、６０年代に実験で湖に放たれた結果、この肉食魚によって他の魚たちは絶滅し、《「ダーウィンの箱庭」と呼ばれるほど多彩で豊かだったビクトリア湖の様相》は一変してしまった。ダーウィンの「適者生存」の論理にナイルパーチは見事に適ったのだ。《それだけでなく、自然環境におけるこの「適合種」（勝ち組？）は、湖の外のさらに広い人工的な環境のもとでも「適合種」だということがわかった。つまり「グローバル市場」という競争の激しい環境で、ナイルパーチは優れた商品たりえたのだ。》グローバル市場の原理という資本主義の「適合システム」と、ビクトリア湖を制圧した「適合種」としてのナイルパーチのグローバル市場における商品としての「適合種」といった、《三重の「適合種」をめぐる物語になっている》この映画は、《「ダーウィンの箱庭」が「悪夢」へと転じる物語でもある》という。「ダーウィンの悪夢」は湖の固有種としての魚たちの絶滅を皮切りに、住民たちに襲いかかる。

《この魚の漁と加工業で千人の「雇用」が生まれ、タンザニアも先進国向けの重要な輸出品目をもつことができ、ＥＵから多少の投資を引き出したとしても、かつてビクトリア湖の豊かな恵みで生きていた周辺の人びとは、生活基盤の崩壊に見舞われ、仕事にあぶれた男たちは所在なくアルコールに浸り、女たちは余儀なく街に身を売りに出かけるようになる。そこにエイズが蔓延し、小さな村でも毎月数十人が死んでゆく。そのため子供たちは放り出され、暴力のはびこる弱肉強食の人工のジャングルを、怯えながらさまよっている。食べ物を争い、強い者の暴力にさらされる日々の悪夢から逃れる唯一の手立ては、プラスチック製の魚の梱包剤を燃やして作る粗悪なドラッグを吸うことだ。》

商品化されたナイルパーチに群らがって生活の安定を得る一部の人々と、ナイルパーチに固有種の魚を絶滅させられたために生活基盤を崩壊させられていった大多数の周辺の人々といった図式がすぐに浮かんでくる。この現状をめぐる言説も図式にしたがって、二つに収斂（しゅうれん）する。《ひとつは湖の生態系を作り変え、それを輸出用産業の資源の宝庫と

した「科学の成果」を称揚する言説であり、国際基準の品質や衛生管理を実現し、梱包材などの関連産業も含めて、企業や雇用の創出を誇示するマネージメントの言説である。もうひとつは、無思慮になされた生態系破壊の弊害を訴え、湖の死滅と周辺の人びとの貧困化や生活状況の荒廃を訴える言説である。》

ナイルパーチがもたらした二様の現実に即した二つの言説が生みだされていることになるが、問題は、ナイルパーチに絶滅させられる前の湖の豊かな恵みを被っていた人々に対して、ナイルパーチがどんな恩恵をもたらすことになったか、であろう。《湖畔の人びとはこの魚の白身を食べることはできない。輸出用に加工され、ＥＵの市場に出されるこの魚は、地元の人びとの口に入るにはあまりに高価なのだ。彼らが食べることができるのは、フィレをとったあとの頭と骨だけである。ＥＵのお墨付きをうるほどに衛生管理に気をくばる工場の裏口から、古いトラックの荷台にそのまま投げ込んで運ばれた魚の残骸は、町外れのもうひとつの露天の加工場で、蛆虫や野鳥につつかれ、働く人びとの目を潰すほどのアンモニアを蔓延させながら日干しにされ、頭は粗悪な油で揚げられる。それだけが国内用の食品になるが、それすら食べられない人びともいる。》

結局のところ、ナイルパーチによって湖の魚も湖周辺の人々も共に駆逐されてしまったということだ。ナイルパーチを売った金はどうして人々に還元されないのか。その金は一体どこに流れているのか。タンザニア政府にも金の一部が収められているなら、政府はその金で食糧を外国から輸入すればいいのではないか。《ところが、国内に必要な食糧もなく、輸入食品を買う金もないから、人びとは飢えているのだ。たとえば国連がそれを援助する。けれども、その援助資金で利益をうるのは、結局は自分たちの産品を押し付ける先進国の食糧産業だということだ。》この事態について、《自然の恵みに依存するエコロジックな生活形態に、産業というエコノミーのシステムがとって代わった》と説明する。《けっして豊かではなかったにせよ、かつてビクトリア湖畔の人びとはその恵みとともに身丈に合った生活をしていた。ところがナイルパーチの繁殖とともに、ここに産業システムが導入され、それがＥＵをはじめとするグローバル市場に組み込まれると、生活環境や社会組成は一変し、あらゆるものは経済の用語で語られ、その尺度で数値化されるようになる。産業が興れば「雇用」が創出され、給与生活者が増える。しかし「雇用」は逆に、そこからあぶれた人びとを「失業者」にする。すべてが金銭化されると、職のない者は空きを求めて人の死をさえ待つようになる。そして人びとの生活も国際基準で「一日一ドル以下」と換算され、「貧しさ」さえ作り出される。》

加速するグローバル化のもとでの「適者生存」の論理に貫かれる食品産業によって、魚が《衛生的に加工され包装されて飛行機で運ばれる魚のフィレと、泥と蛆虫のなかで日干しにされる頭と骨》に分離されるように、人間もまた「適合種」と「不適合種」に分離されるのだ。この「適者生存」の論理は驚くべきことに、輸送機までも貫いていることを映画は描きだす。タンザニアのムワンザにやってくるような輸送機の多くが、ロ

シアやウクライナなどの旧ソ連諸国の「不適合種」の安価な、大きいだけが取り柄の輸送機である。それらは《往路では、アフリカの紛争地に武器を運び、そこで積荷を空にしてタンザニアにやって》きて、《魚を満載してヨーロッパに飛び立つ》のだ。《映画の最後で、ある操縦士がもらす「小さな話」 ── あるときロシアから戦車のようなものを二輌アンゴラに運び、その帰路、南アフリカでブドウを積んでヨーロッパに飛んだ。クリスマスにヨーロッパの子供たちはブドウを受け取り、アンゴラの子供たちは銃弾を受け取る……。この操縦士は語る、自分はそれでも、世界中の子供たちが同じように幸福であってほしいと願っている、と。》

この映画に登場する、前任者が賊に殺されたおかげで一晩１ドルで魚類研究所の夜警の職を得たラファエルという男は、《以前は兵士として戦争に加わり、何人殺したかわからないが、今でも戦争が起こるのを待っている。そういう人間は多いぜ、とも言う。戦争になれば、国が兵士として高い給料で雇うからだ。さもなければいつ職にあぶれるかわからない。その彼も、できれば教育を受けたいという。そうすればもっとよい職につけるから、と。一晩１０ドルでパイロット相手に売春し、虐待で殺されてしまうエルザという女性も言っていた。学校に戻りたい、コンピュータを習いたいと。彼らはこのグローバル化の縁で浮沈している。》

ラファエルと言い、エルザと言い、黒人に付けられたヨーロッパ的な名前にも注目する。キリスト教の洗礼名を持っているだけでなく、《エイズで死んだ近親を葬るとき、アフリカ風に体を揺らして踊る人びとが歌うのは、他でもない賛美歌なのだ。この映画には拡声器でディスクジョッキーよろしく絶叫する宣教師も登場する。彼は野外スクリーンに『ジーザス・クライスト』の奇蹟の場面を映し出し、神はわれらの海に豊かな魚を与えたもうたと説教する。グローバル化の縁に開く崖下の奈落に落ちた、救いようのない人びとの魂に救いを与えるシステムをも、このグローバル化のプロセスはあらかじめ用意しているかのようだ。こうしてエンターテインメントと化した宣教と慰撫が、痛めつけられた魂が行き場を失って「ならず者」になることを、現代の政治用語で言うなら「テロリスト」になることを妨げている。ヨーロッパがアフリカ世界に浸透したのは、まずキリスト教化によってだったということが再び想起される。救いのシステムもすでに西洋によって用意されている。》

アフリカ社会に浸透したグローバル化はキリスト教化と一体となって、痛めつけられた黒人たちが《行き場を失って》、「テロリスト」になる余地すら奪い尽くしてしまったということだ。グローバル化によって《痛めつけられた魂》は、キリスト教化によって天国で救われる仕組みになっているのである。〝ゆりかごから墓場まで〟といった文句が、新たに浮かんできさえする。「テロがあって、報復をして、またテロがあって、報復をして……、それから世界はどうなるの？」という、冒頭で発した問いを改めてここに持ちだしてみる。テロさえも起こらないようにアフリカ社会の黒人たちは徹底的に痛めつけ

られていくなら、「それから世界はどうなるの？」という問いがそこで呻くように発されずにはいなくなる。少なくともビクトリア湖の住民たちが被っている、グローバル化による理不尽な悲惨を見せつけられるなら、テロが起こる余地があるということ自体、非常に人間的に感じられるし、そこに救いが見出せるという皮肉なことにならないだろうか。

いかに「テロ」が起こらないようにするか。テロの発生要因を除去するのではなく、不満と怨念に駆られた人々がテロに走らないように完璧に隔離してしまえばよいのだ。残った不満と怨念の回収はキリスト教の重要な役割とされる。この装置が巧妙に機能しないところでテロは頻発しているということになるだろう。イラクやパレスチナなどのイスラム社会で自爆テロが続出しているということは、グローバル化によってもたらされる矛盾を回収する装置としてのキリスト教がイスラム教によって食い止められているということにほかならない。だからこそ、イスラム社会をグローバル化の波に巻き込むためには、キリスト教によってイスラム教を解体しなければならないという使命が軍事侵攻のかたちとってあらわれているといえよう。

西谷修は去年の夏、４回シリーズで放映されたＮＨＫスペシャル『アフリカ・ゼロ年』で取り上げられた、スーダンの内戦、ナイジェリアの石油、モザンビークの少年兵、南アフリカのエイズ問題を通して、《グローバル秩序への参入をめざす最近の中国の動き》に触れながら、いまや「アフリカ」はアフリカ大陸に集中しているだけでなく、アフリカ大陸以外の世界中に露出しつつあることにまで視線を配る。

《中国は必ずしも「不適合種」ではない。今まであえて適合しようとしなかったが、グローバル環境の形成によって中国もそこに参入する（あるいは呑み込まれる）ようになり、西洋タイプとは違う独自の「適合」形態を作り出そうとしている。そして今では欧米、日本、中国がアフリカにさまざまな形で進出している。あたかも、限定された地球上で生き残るためには、人みなそれぞれの「アフリカ」を必要とする、というかのように。けれども、アフリカの広さにも限度があり、今では多くの先進国が、それ自身の内部に「アフリカ」を作り出そうとしている。中国は内部にすでに「アフリカ」を持つことが、世界市場への進出に大きな利点となっているし、グローバル世界の盟主アメリカがそれ自身の「アフリカ」を抱えていることは、ハリケーン「カトリーナ」の災害によってはしなくも露呈されることになった。》

グローバル世界は自体を存続させるために、「下流社会」としてのアフリカを外部に不可欠とするだけでなく、内部にも「アフリカ」を作り出す仕組みになっていることが指摘されている。そうすると、グローバル化とは「アフリカ」化の進行でもあることがみえてくる。グローバル化と「アフリカ」化とがパラレルな関係にあることは、グローバル市場に参入する各国の社会の内部で、人々も「適合種」と「不適合種」に分離されていく運命にあることを意味する。市場原理社会主義へと改革を押し進めようとする日本で、不平等社会が「下流社会」を出現させつつある事態とは、日本社会が「アフリカ」

化の促進を不可避とする構造に貫かれようとしていることを物語っているのだろう。グローバル化が市場経済の論理に貫徹されているなら、そこに《適者生存という自然淘汰の論理》が剥き出されてくるのは必然だ。
《「適合種」しか生き残れない。そこには「正しさ」など存在せず、とにかく生き残ったものが「適合」を証明したとして、もっとも環境に適した「よい種」だったということになる。それを日本では俗に「勝ち組」というらしい。経済学が自然の研究によって証明されたのか、あるいは自然淘汰の理論が世界の経済化をすでに反映していたのか。いずれにせよ、人間社会の組織運営と自然の長期的なメカニズムを扱うというこの二つの観点は、今ではほとんど区別されないものになっている。近代資本主義の勃興期の経済的リベラリズムと、今日のネオ・リベラリズムの違いも主としてその点にある。アダム・スミスの頃には「自然史」はまだ「博物誌」の段階にとどまっていた。進化論の登場は存在の「正統性」に関わる論理を一変させた。今では社会主義の衰退という人間社会の出来事さえ、「自然淘汰」のように説明される。それ以来、「みえざる手」は単なる比喩にとどまらず、「適者生存」というグローバル世界の公理として認められるようになった。それがネオ・リベラリズムの新しさだ。そして、それによって今度は戦争さえ商品とする、新たな「三角貿易」がよみがえっている。》
　さて、この映画『ダーウィンの悪夢』を撮った６６年生まれのザウパー監督は、インタビュー（『世界』０６．１）に応じて、４年を費やした時間の中で映画に撮られた人々自身の変化を、グローバル市場との絡みで次のように語る。
「変化と言えば、魚工場のオーナーは最初に会ったときには、すべてがいかにうまくいっているかを説明しようとしました。映画の中でも『ワンダフル』と言っていますね。でも最後には『数年して魚がいなくなったらどうしますか』と聞くと、『もうじきだめになることはわかっている』と言いました。乱獲しているし、魚は共食いするし、湖は生態学的には死んでいる。それでも『別にかまわない。だからいま綿花に投資しようとしているんだ』と言うのです。
　これは興味深い変化です。長期的にではなく短期的にということですが、彼は、資本主義の論理は自然の論理よりずっと強いと認めたわけです。彼は、世界銀行から借入れをして２～３年のうちに大金を稼ぎ、工場を閉鎖してもおつりがくる。そして相変わらず大金持ちのまま、儲けた金をスイスの銀行口座に入れて、それでトロントにホテルをオープンする。もっと儲けて、また投資して、今度はケニヤかタンザニアかどこかに新しい金鉱を開く、というわけです。
　これが私の経験を通して見つけた最大の懸念です。世界を覆う資本主義は、とんでもなく成功している。あまりにうまくいきすぎて、あとには焼け野原しか残らないでしょう。」
　湖の在来種の魚を食い尽くして勝ち残ったナイルパーチも、乱獲と共食いによって湖の生態学的な死と共に絶滅を避けられなくなるが、そのナイルパーチでしこたま儲けた

人々は今度は綿花の投資で更に大儲けしようとするわけだ。ナイルパーチの商品化によって貧困に追いやられた湖周辺の住民は、死に瀕する湖と共に見捨てられるという構図が語られている。ナイルパーチは湖の在来種の魚を食い尽くしただけだが、そのナイルパーチで儲ける人々は湖諸共(もろとも)食い尽くすや否や、次の獲物をめざすという行動がグローバル市場では常態なのだ。徹底的に食い尽くされてそこに残されるのは「廃墟」であり、アフリカに参入してくるヨーロッパ、アメリカ、中国、その他の国々はすべて、「どこがいちばんうまくアフリカから盗めるかという競争」を繰りひろげ、広大な廃墟がつくりだされることによって、「構造が破壊され、人々が破壊され、死んでいくのが」浮き彫りにされていく。

ザウパー監督は、この映画を撮ることになったきっかけについても語っている。９７年、「コンゴ内戦のさなかのルワンダ難民を主題とする映画（『キサンガニ日誌』）を作ってい」た彼は、ルワンダ難民への「ヨーロッパからの国連援助物資を運んでいた」ロシアの輸送機のパイロットから、コンゴに持ってくるのは援助物資だけではなく、「戦争に必要なものはみんな運んでいるよ」と聞かされる。驚く彼に、「どうしてコンゴで戦争ができるのかね。いったい誰が爆弾やカラシニコフを持ってきていると思うんだ。エールフランスでもないし神様でもない、われわれだよ」と、パイロット連中が笑ったことが映画を着想するきっかけになったと答える。

「この話は、現代の大きな狂気を表現していると思います。飛行機は機械の象徴であり、たくさんの象徴 ── グローバル化の象徴、暴力の象徴を運んでいます。そして後になってはじめて、この飛行機がヨーロッパに戻るときには魚を運んでいることを知ったのです。

これも二重の皮肉でした。というのも、これらの輸送機はヨーロッパやアメリカから、遺伝子操作で作られたとても安価な食品を「人道援助」として運んできて、アフリカの貧しい人びとに食べさせる。そしてその帰りには、おいしくてヘルシーな魚の切り身をヨーロッパや日本に運んでいるのです。映画の中にも一度日本の話が出てきます。

行き先が日本であれアメリカであれヨーロッパであれ、論理はいつも同じです。いまここにある紙をつくるための木材は、日本ではなくてインドネシアかどこかで切り倒されたものでしょう。「紙はどこから来たのか」というテーマで、日本でも同じような映画をつくれるし、あるいは石油については、もっとひどい内容の映画を作ることができるでしょう。たまたま私は魚の切り身を題材にしたということなのです。」

人道援助物資と軍事兵器とが一緒に積み込まれて飛行機でアフリカに運ばれているということは、内戦を惹き起こし、大規模に拡大させていく武器を運び込む一方で、他方では難民と化した人々に配るための人道援助物資を運ぶという、なんとも形容しがたい愚劣な事態が進行しているということだ。もちろん、グローバル市場からすれば、儲けの大きい商品の点で軍事兵器も人道援助物資も全く変わりない。運んでくるだけではない。武器と共に「遺伝子操作で作られたとても安価な食品」、ヨーロッパやアメリカの

人々には危険食品としてけっして販売できない「人道援助」食品をアフリカに運び、その帰途には「おいしくてヘルシーな魚の切り身をヨーロッパや日本に運んで」、より一層ボロ儲けする、これがグローバル経済なのだ。この「魚の切り身」は「紙」や「石油」にいつでも置き換えることができる。

友人になったパイロットはとてもいい男で、彼が武器を運んでいることが信じられなかったし、彼に限ってそんなことはないと思い込もうとしてきたが、彼が「そうなんだ。それが自分の仕事だ」と言ってくれたために、「私は私自身の不信感に直面せざるをえませんでした」とザウパー監督は語る。「私自身の不信感」とは「自分がすでに知っていることを、十分に信じることができないという現象」が自分の身にも起こっていたということである。「なぜこの問題が自分にとって大切だったのか。最後の場面は、われわれの時代の大きなジレンマを表現しているのです」と、なにが一体問題であり、誰が悪なのかについて次のように説明する。

「つまり産業化社会では、産業化を通じて仕事の分業が進み、責任の分断も見られるわけですが、それは一つの大きな問題を象徴しています。誰が何の責任を取らなければならないのか。いまや悪者を追跡することはできなくなっているのです。

テキサスなら『よし、あいつは悪だ、やっちまえ』となるのでしょうが、そうはいかないことは誰にでもわかります。いわゆる『悪者』がいるのではなく、われわれがみんなで作っているシステムそのものが悪者なのです。いまや戦争が起こったのはあいつの責任だ、と言えるような人間、ヒトラーのような存在はいない。」

「誰が何に対して責任があるのか」という問いのなかには、もはや具体的に特定される人物は存在せず、「われわれ皆が作っているシステム」がそこに浮かび上がってくる。したがって監督は、「それを解きほぐして、もっと総合的な方法で、自分たち自身に対して何をやっているのかを理解する術を見つけ出さなければなりません」と言う。『ダーウィンの悪夢』で描かれた〝グローバル化の悪夢〟に呻（うな）されながら、映画『ホテル・ルワンダ』にすでに言及していることに気づくだろう。９４年の３カ月間で百万人近い人々が虐殺されたルワンダ内戦については、ザウパー監督が９７年当時、「コンゴ内戦のさなかのルワンダ難民を主題とする映画（『キサンガニ日誌』）を作ってい」たと語っていたし、出会ったロシアのパイロットたちが国連援助物資と一緒にアフリカに武器も運んでいることから、ルワンダ内戦に使用された軍事兵器についても示唆されていた。『ホテル・ルワンダ』でも、内戦で虐殺された４万人もの遺体がビクトリア湖に捨てられたことが示されており、ビクトリア湖の肉食魚ナイルパーチは当然その遺体を食って成長して、ヨーロッパや日本に食用として輸出されているので、我々日本人も知らずにルワンダ内戦の死体を喰らっていることになるのだ。グローバル市場のおかげといってよい。西谷修がいうように、グローバル世界が《魚だけでなく人間をも「適合種」と「不適合種」とに分離する》論理で成り立っていたなら、紛れもなくルワンダ内戦もまた、

グローバル化の論理で貫かれているのがみられる。

第一次大戦後、欧州列強によるアフリカの分割統治の結果、ルワンダを植民地化したベルギーは統治を容易にするため、ツチ族とフツ族の容姿の差を利用した人種ＩＤカードを発行し、人種差別思想を蔓延させていった。このことが内戦の根底に大きく横たわっており、人種ＩＤカードの発行とはルワンダ国民を「適合種」と「不適合種」とに分離する発想にほかならなかった。６２年にベルギーからの独立を果たしたルワンダが、それまでのベルギーを後ろ盾とした少数派のツチ族による支配を引っくり返して、多数派のフツ族が支配し、圧政を敷いたために、ツチ族との間に内戦が勃発した。ルワンダ内戦といわれる大規模な虐殺が起こったのは、フツ族とツチ族の間に和平協定が結ばれようとしていた矢先の９４年４月６日、ルワンダの大統領を乗せた飛行機が何者かによって撃墜されたことがきっかけだった。「われわれの大統領が殺された。……すべての元凶は、ツチ族のゴキブリどもにある」というラジオの声が響くなかで、当初はフツ族の民兵グループが市内を威圧的に練り歩き、ツチ族に暴行を加えるかたちで始まった。

映画は、外国人客の多い外資系ホテルの支配人ポール（ドン・チードル）が、たった一人で１２００人ものツチ族を救ったという実話を基に作られている。ポール自身は穏健なフツ族だが、妻はツチ族であるために、フツ族民兵の残虐な仕打ちを正面から批判できない。危険を感じて彼の家に逃げ込んできた知人のツチ族をホテルに避難させ、フツ族もツチ族も一緒に働いている従業員にむかって、「このホテルの中ではツチ族もフツ族も平等だ」と宣言して、彼の家族だけでなく、ホテルに続々と逃げ込んでくるツチ族を守るために、彼は獅子奮進（ししふんじん）の働きをする。国連平和維持軍の大佐やルワンダの軍隊の将軍などとも上手に付き合うことのできる、いつでもネクタイを締めている洗練された支配人である彼はそんな人脈を利用したり、金を使ったり、虚言を弄したり、暴力以外のあらゆる手段を駆使して戦いを繰りひろげる。

ポールたちルワンダ人の西欧に対する期待がものの見事に裏切られていく、いくつかの非常に印象的なシーンが描写されている。ルワンダ国内の危険な情勢を感じ取った各国の政府は国連を通じて、ルワンダ国内に滞在する自国人（白人）に帰国命令を下し、次々と飛行機に乗せていく。報道カメラマンが撮ってきた衝撃映像が全世界で放映されれば、必ず世界中の人が行動して国際救助が来ると確信するポールに、飛行機に乗せられる間際に、カメラマンはこう言う。「世界の人々はあの映像を見て ── ″怖いね〟と言うだけでディナーを続ける」と。国連平和維持軍の大佐もまた、「我々は平和維持軍だ。仲裁はしない」と繰り返すのみである。海外資本下にあり、国連兵士がガードするホテルに民兵たちもうかつに手は出せないものの、いつ大挙して襲ってくるかもしれず、難民キャンプのような様相を呈しつつあるホテルに困惑するポールに、大佐から朗報がもたらされる。ヨーロッパ諸国が介入の準備を進めており、数日で部隊がルワンダに到着するというのだ。

数日後、ポールたちの元に待ち望んだベルギーの国連軍がやってくるが、しかし、それはルワンダ人を援助するためではなかった。犠牲者の出ている国連兵士や職員、まだルワンダにいる外国人を退去させるためのものだった。やってきた国連軍と激しく口論していた大佐はポールに、「君が信じてる西側の超大国は、〝君らはゴミ〟で、救う値打ちがないと思ってる。君は頭が良く、スタッフの信望も厚いが、このホテルのオーナーにはなれない。黒人だからだ。君らは〝ニガー〟以下の、アフリカ人だ。だから軍は撤退する。虐殺を止めもしない」と言う。仏、伊の兵士も撤退し、優先的に避難するのは白人ばかりで、米国務省は「大量虐殺」の事実すら認めようとしない。平和を回復すべく派遣された国連平和維持軍は、内戦に介入できないという建前に縛られて、無力を暴露し、虐殺が目の前で行われていても一切手出しはしないという不条理さが浮き彫りにされていく。

世界がルワンダに一斉に背を向けるなかで、ポールは独り避難民を救助する戦いに全力を注ぐ。ツチ族の反攻によって、３００万人ものフツ族がザイール（現コンゴ民主共和国）など国外へ逃亡する事態が起きることによって、西側諸国はやっと反応し、人類史上最大の救援活動を９６年３月末まで展開させた。その後まもなく近隣の数カ国で紛争が起きたことがきっかけで、難民のほとんどは９７年までにルワンダへ戻り、大虐殺をもたらした内戦は一応収束することになった。世界のグローバル秩序というものがどういうものであるかというその一端が、この西側諸国の介入の仕方のなかにもはっきりとみえてくる。ルワンダ国内で行われている事態であればどんな大惨事であっても介入しないが、その内戦による影響が近隣諸国にまで及んで、グローバル秩序の維持に抵触するようになったとき、西側諸国は重い腰を上げるということだ。自分たちの利害にかかわる大問題であるが、ルワンダ人が何万人殺されようが、彼らの損得には何の関係もないのである。

『ホテル・ルワンダ』は０４年１２月、アメリカの劇場数館で公開されて評判となり、翌月には２３００館に拡大公開され大ヒットを記録し、主演のドン・チードルはオスカー主演男優賞にノミネートされることになった。批評家たちにも大絶賛されたほどの映画なら、日本での上映にもなんの支障もなかろうのに、《だが、この高評価が裏目に》なってしまったと、米在住の町山智浩は、「賞を取ったので値段が高くなってしまった。『ホテル・ルワンダ』は１０万人は動員しないと採算が取れない」という配給会社の関係者の言葉に触れて、『アエラ』（０５．９．５）でこう言う。《アフリカやインドの厳しい現実が題材では、日本人は見たがらないと判断されたのだ。それは過去のデータに基づいたビジネス上の判断だろうが、こういう映画を見る人がいない国が、国連常任理事国になってどうするのだろう。》

２０代の若者たちによる上映を求めてのネット署名活動により、日本でも公開されることになったが、宣伝もされない１日１、２回上映の足の不便な単館系での上映であったために、私が観た時は観客はパラパラであった。グローバル化というものの浸透がここにも垣間見られるのである。　　２００６年3月１０日記